

---

# 猫母さん 2

南部鶴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猫母さん2

### 【コード】

N3103P

### 【作者名】

南部鶴

### 【あらすじ】

猫母さん第二弾です。

三毛猫の猫と、ゴールデンレトリバーの仔犬が織り成す適当な会話です。

(前書き)

猫母さん第二弾

猫こと三毛猫のミケ

金犬こと仔犬のレオ

まったり、のほほんと出来たらいいなあ。

金犬「母さんの名前は何ですか？」

猫「唐突にどうしたのよ？」

金犬「知りたいです」

猫「それだけ？」

金犬「はい」

猫「そうなの。まあいいわ。私の名前はミケよ」

金犬「ミケですか？」

猫「たまに、ミイーになるわ」

金犬「ミケ母さん」

猫「だから母ではないわ」

金犬「略してミカン」

猫「略さないの」

金犬「母さん朗報です」

猫「朗報だった試しがないわ」

金犬「僕の名前が決まりました」

猫「あら、よかったわね」

金犬「レオです」

猫「あら、カツコイイ」

金犬「ミケレオ」

猫「合わせないの」

金犬「オレミケ」

猫「混ぜないの」

金犬「俺ミケ？」

猫「ミケは私よ」

金犬「母さん新事実」

猫「私が貴方の母であることが事実じゃないわ」

金犬「僕の名前はレオじゃなかった」

猫「ナツ、ナンデスッテー」

金犬「『オバアチャン』が僕を『亮』と呼んでいました。僕の本当の名前は『りょう』なんです」

猫「それは『オバアチャン』がなまっているだけよ」

金犬「なんと！」

猫「私は稀にミケ乃助になるわ」

金犬「てえいへんだ母さん」

猫「貴方の言葉使いの方が大変よ」

金犬「とにかくくてえいへんなんだ！」

猫「どうしたのよ？」

金犬「昨日まで地面だった場所が今日は池になっていたんでい」

猫「あれは田んぼよ」

金犬「この世の終わりだあー」

猫「まずは話しを聞きなさい」

金犬「遊ぼう母さん」

ダッシュ

猫「疲れるから嫌よ」

回避

金犬「なら勝手に遊びます」

追撃

猫「面倒だわ」

ジャンプ

金犬「ワン！」

ジャンプ

猫「ニヤ」

華麗に着地

金犬「ギャン！」

見事に激突

猫「・・・」

上から見下ろす

金犬「キャンキャン」

憐れに墜落

金犬「母さんお腹が空きました」

猫「母ではないけど私もお腹が空いたわ」

金犬「あんなところにオヤツが！」

猫「その隣には『オバアチャン』」

金犬「オヤツに向かって突撃！」

猫「あつ、無理矢理食べようとすると・・・」

金犬「キャウン！」

猫「ほら、怒られた」

金犬「母さん質問です」

猫「母ではないけれど答えましょう」

金犬「この家で一番偉いのは誰ですか？」

猫「どうしてそんなことを聞くの？」

金犬「順位付けします」

猫「そんなことをしてどうするの？」

金犬「本能です」

猫「本能なら仕方が無いわ」

金犬「では教えて下さい」

猫「私」

金犬「遊ぼう母さん」

猫「後でね」

金犬「母さん遊びませんか？」

猫「だから後で」

金犬「ここは母さんと遊ぶべきかと」

猫「今は遊ぶべきではないわ」

金犬「遊ばないと損ですよ母さん」

猫「遊んでも徳にはならないわ」

金犬「遊ぶことこそ使命なのですぞ母さん」

猫「母さんに使命なんて無いわ」

金犬「へーい母さん。遊ぼうぜい」

猫「言い方を変えても遊ばないわ」

金犬「まだ遊びたりないよ母さん」

猫「まだ遊んですらいないわ」

金犬「あー楽しかった」

猫「まさかの言葉遊び」

金犬「母さん質問です」

猫「母ではないけど、なーに？」

金犬「どうして母さんの名前は”ミケ”なのですか？」

猫「『オカアチャン』達がそう呼ぶからよ」

金犬「では、どうしてそう呼ぶのですか？」

猫「私の毛並みが三色だからよ。三毛猫だからミケ」

金犬「安直です」

猫「安直ね」

金犬「『オカアチャン』達は単純です」

猫「単純ね」

金犬「こんなのヒドイです」

猫「・・・そうかしら？」

金犬「そうです！ 母さんにはもっともっと似合う名前があるはず  
です！」

猫「・・・」

金犬「『オカアチャン』達に文句を言ってきます！ そして母さん  
の名前をもっとカッコイイのに変えてもらいます」

猫「あつ、こらちよつと、待ちなさい！・・・行っちゃたわ」

『ん？ どうしたレオ？』

『おお？お腹でも空いたのか？』

『やいや。遊んでほしいんか』

『違うっばいよお婆ちゃん・・・って吼えた！』

『本当にどうした？ レオが吼えるとか珍しいな』

『こらレオ！静かにしなさい！って痛！』

『どうしたの母ちゃん？』

『痛あー！ レオが噛んだあ』

『『こらあレオ！ 噛んじゃダメでしょ』』』

『んな一斉に怒らなくても・・・』

金犬「・・・ただいまです」

猫「お帰りなさい・・・どうしたの？ 随分としよげちゃってるけど」

金犬「・・・母さんの名前を変えてくれるように『オカアチャン』」

達に言いに行ったら」

猫「行ったら？」

金犬「・・・全然話しを聞いてくれず」

猫「まず言葉が通じない」

金犬「・・・仕方ないので僕の本気を伝える為に」

猫「為に？」

金犬「・・・『オカアチャン』に噛み付いたら」

猫「なんてことを」

金犬「みんなに怒られました」

猫「予想通りの結末ね」

金犬「・・・くうん」

猫「可愛くしても噛み付くのはいただけないわ」

金犬「・・・でも母さんの為に」

猫「私がいつ自分の名前が嫌だと言ったかしら？」

金犬「・・・くうん」

猫「・・・はあ。・・・あのねえ、少し勘違いしているよう

だけど、私はこの『ミケ』という名前を嫌ってないわ。むしろ気に

入っている」

金犬「・・・でも安直です」

猫「安直なのがいいんじゃないの。安心できる素直な名前よ」

金犬「でも」

猫「単純だから何？ 安直だからどうしたの？ 適当に名付けた？

あら、いいじゃないの。私は別に困らないわ。私がどんな名前

であつても、私の名前が私の名前である以上、大好きな家族が私を

呼んでくれるわ」

金犬「・・・」

猫「カッコイイ名前じゃなくても。カワイイ名前じゃなくても。大

好きな家族が呼んでくれるなら。それはとても素敵な名前よ。

『ミケ』って呼んでくれるから、私は嬉しくなるの。

『ミケ』って呼んで、喉を撫でて、頭も撫でて、抱っこしてくれて、

「ご飯をくれる。」

『ミケ』「つて名前が私と家族を繋げてくれるの  
わかった？」

金犬「……」

猫「まあ、今は解らなくていいわ。いずれ貴方が大きくなればちや  
んとわかる」

金犬「……ごめんなさい母さん」

猫「え？」

金犬「母さんの気持ちを考えないで僕」

猫「……にゃー。それがわかってるなら十分よ。十分。レオが謝  
るなら、私はお礼を言わなくちゃいけないわ。」

ありがとう、私の為に頑張ってくれて」

金犬「……わん」

猫「にゃー」

金犬「『オカアチャン』達には怒られたけど、やりました！」

猫「？」

金犬「母さんが初めて僕を名前ですんでくれました。嬉しいです。  
凄く嬉しいです」

猫「……にゃあ」

金犬「母さん？ どこ行くの母さん！ 待ってよ母さん」

猫「……ちよつと恥ずかしくなっただけよ」

金犬「え？聞こえないよ？あつ、待って、待ってよ母さん！」

猫「……にゃー」

金犬「わかった！ 追いかけてこだね。いいよ！それじゃあ

遊ぼう母さん

」

わんぱー

(後書き)

ミケとレオ、本当にゴメン。

さて、思わず書いてしまった第二弾です。なんだかミケ母さんがツンデレみたいになった気が・・・気のせいだといいなあ。というかあれです。最近疲れてるんです。ごめんなさい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3103p/>

---

猫母さん2

2010年12月10日19時27分発行